

氏名	武田恭子
学位の種類	医学博士
学位記番号	論医博第585号
学位授与の日付	昭和50年3月24日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	在宅要介護老人に関する社会医学的調査研究

論文調査委員 (主査) 教授 桂 英輔 教授 藤原元典 教授 佐野晴洋

論文内容の要旨

研究目的

近年我国の人口現象は、死亡率の低下、出生率の著しい減少（少産少死型）に伴い、高令人口の相対的、絶対的増加を示している。

老人の健康と環境をめぐる諸問題が大きく社会問題となっているが、老人介護に伴う家族や老人の生活負担の問題にまで立入ったものはあまり例をみない。

著者は、介護を要する老人のもつ問題点及び介護に影響を及ぼす社会医学的要因を追求するために本研究を行なった。

研究内容

大都市（京都）、農村都市（長浜・綾部）在住の65才以上の老人について、1963年7月から1967年3月にかけて経年調査を、郵送アンケート調査、訪問面接調査で行い、更に経過中に死亡した老人の家族に対しても郵送アンケート調査、訪問面接調査を行った。対象者数は大都市（以後都市という）1025人、農村都市（以後地方という）2113人である。これら対象者数の動作機能、病臥状況、家庭生活状況、経済状態を調査し、又死亡老人については死亡前の介護に於ける社会医療の問題点を追求し、次の知見を得た。

I. 介護を要する老人は都市・地方共に4～5%である。経年的推移をみると要介護老人の $\frac{1}{3}$ は1年以内に死に至り、 $\frac{1}{3}$ は介護不要となり、残り $\frac{1}{3}$ が継続要介護者である。

II. この要介護老人のうち、介護をする人の無い老人が都市・地方共に約30%あり、これらの老人は病院にも施設にも収容されず、家族にも受入れられる条件のないまま放置されている状態である。

III. 介護者のある老人においても、介護が不適当と思われるものが約30%に認められ、都市・地方で差を認めない。介護の問題点を列記すると；

1) 介護は種々の面で、重荷となり、家庭の負担になっているところが多く、又介護を手伝って貰える人を要求するものが多い。

- 2) 介護者は都市・地方でやや異り、都市では介護する人が「配偶者」とか「家族以外の人」が多く、地方では介護する人が「息子・娘」とか「孫」が多い。老人自身の介護に対する満足感は、地方に高く都市に低い。
- 3) 望ましい介護がなされる要因としては、家族構成、扶養意識、経済的条件もあるが、介護状態の良いものは老人と家族の人間関係の良いものに多い。更に病臥前に老人の家庭内に於ける発言権、経済力のある家庭内の地位の高かった老人は死亡前の介護状況が良い。
- 4) 家族の介護に対する負担の内容及び問題点を分析すると、自覚症状を自覚してから病臥までの期間、病臥期間、疾病、症状等により介護の負担の内容は異なる。即ち夫々の老人の世話に対する問題点・看病に対する問題点が異なり、一定の様相が認められる。

症状を自覚してから病臥迄の期間の長い循環器系疾患、中枢神経系疾患に問題点が多く、病臥期間の長い老衰・中枢神経系疾患に家族の負担が大きい。いわゆる老人病といわれる中枢神経系疾患・循環器系疾患・老衰では排尿、排便、褥瘡の世話に困るものが多い。中枢神経系疾患・呼吸器系疾患・循環器系疾患では失禁、下痢、胸の苦しさ等の看病に困るものが多い。

- 5) 介護に対して医療関係者の指導があったものは極めて少く、保健婦・看護婦の指導もみられなかった。

前述の点からみて老人のための介護のあり方を考えると、介護者の無い場合はもちろんのこと、介護する家族がある場合でも、家庭奉仕員のごときものによって老人の介護を援助することが必要である。しかし一率に家庭奉仕員を配置するという事は問題がある。家庭奉仕員の絶対数を増員すると共に、介護の効率を良くするために、食事の世話・話し相手等の世話をする家庭奉仕員や、褥瘡等の看病をする専門的知識をもった保健婦や訪問看護婦の訪問指導が、夫々の疾病・症状・老人のおかれている状況を中心に考慮されて配置されなければならない。

介護をする者のない老人或は在宅看護で困難な老人は施設に収容されるのが望ましい。この為に施設の増設・改善が必要である。又老人を施設→中間施設→家庭と循環させることが必要である。

論文審査の結果の要旨

本研究は1年おき3回、都市在宅老人3,738名と、その内調査期間中に死亡した老人の家族245件を対象に追跡訪問調査し、在宅要介護老人の介護上の社会医学的問題点と在宅老人介護のあり方について解明している。研究の結果、対象中要介護老人は5%、介護を要するに至った老人は1年間に3人が死亡、要介護老人中介護者なく放置が、介護者があってもその人が介護内容が不適切でこの傾向は殊に循環器系、中枢神経系疾患の場合に顕著で、家族との人間関係も不良のものが多い。家族看護の知識不足等で介護を負担と感ずる家族が約8割、自覚症状あるも医療中断及至未受診のまま死に至った老人が少くない。老人にとり望ましい介護がなされる要因に、家族の経済条件、家族構成等があげうるが特に家族との人間関係が重要。以上の結果に基き、在宅老人介護は家族のみに任せず、専門的訓練を受けた保健婦、訪問看護婦の派遣による家族介護の援助の体制が必要であり、第二に医療機関等施設と家庭の間に中間施設を設け、老人の容態により、これらの間を往復させる体制の確立が必要と論じている。本研究は学術上価値ある研究で、医学博士の学位論文として価値あるものと認める。